リレーエッセイ

教えられる立場から教える立場へ

大阪府立大学の床波先生よりリレーを引き継ぎました九州大学の大橋です。床波先生とは，SPring−8 でのXAFS 測定でお会いしたのがきっかけで，以来親しくさせていただいております。このときは，同年代の研究者として徹夜の測定をしながらいろいろお話させていただきました（もっともこのときは，ほとんど化学とは関係のない話で盛り上がってしまいました）。

今の私の所属は「高等教育開発推進センター」というところで，教育をより重視する立場にあります。小学校での学級崩壊に加えてゆとり教育問題など，教育に関する問題が頻繁に提起されている昨今，ゆとり世代の大学入学・卒業とこれに伴う問題に関心を持って職務に従事しております。その一方で僕が教えているゆとり世代の学生を見ると，よく勉強しているなあと感心します。もしかしたらゆとり世代の学生だけ質が悪いというわけではなくて，いつの時代も年長者から見て学生や若い人の質は問題になるということかもしれません。

このような感じでえらそうに教育の話をしていますが，学生時代の私は決して良い学生ではありませんでした。大学時代に授業をぬけだして，単位が取れなくて再履修なんてこともよくありました。しかし，それ以上に記憶に残っているのは小学 4 年生の時のことです。

「学級崩壊」…今でこそメジャーな単語になりましたが，その当時はまだ認識はあったにせよ明るみには出ていませんでした。学級崩壊というのはいろいろ調べる限り，おおむね「児童・生徒が教師の授業に従わず授業が成立しない状態」を指すようです。この言葉は 1990 年代後半から頻繁に使われるようになったようですが，私はそれより以前の 1989 年に体験してしまいました。いや今考えれば主導していたひとりでした（かろうじて持ちこたえていたよ，という同級生の話もあるので，「学級崩壊未遂」かもしれませんが）。学級崩壊の種類はいくつかあるようで，現在でも大きな問題になっているのはクラスを飛び出して遊びに行ったり，行方知れずになったり，といった「発達障害」の児童・生徒が中心となる崩壊のようです。ですが，私たちのクラスは典型的な崩壊（先生の教育能力の欠如による崩壊）でした。崩壊を起こした目線からというのも珍しいと思いますので，今回はこの誌上を借りて当時のことを振り返りつつ，当時の先生に懺悔したいと思います。

小学 3 年生の時の担任の先生がベテランで，毎日ドリルの宿題を課すなどかなり厳しかったのもあったのかも知れませんが，クラス替えなし・持ち上がりで 4 年生になったときに，若い先生だったのが大きな要因だったのでしょう。私たちは子供なりに先生を軽く見てしまいました。いわゆるタガが外れた状態になったのです。

私も最初は自分なりにまじめに授業を受けていたと思います。転機は理科のテストのときでした。月の満ち欠けの問題で，確か下弦の三日月の 7 日後の月の形を 4 択で選べという問題でした。当然，上弦の三日月が正解なのですが，なぜかその先生が用意した答えは下弦の半月でした。

今でしたら教員でも人間だから間違いなんてあるよ，なんて寛容に対応するかもしれませんが，テストだったこともあってかなり反発しました。それに対して先生の用意した修正解が「6 日間では月の満ち欠けはほとんど観測できないはずだから，答えは変化しないから下弦の三日月」でした。子供ながらに憮然としましたが，それと同時に諦観の境地に達しました。これ以外にも理数系を中心にいろいろあったのですが，そういうことが積み重なって私の中でのその先生への信頼が失われていきました。小学校の先生は何でもできなければならないので今では尊敬する職業のひとつですが，当時は何せ若かった。反発して授業を聞くことを諦めて授業中の遊びに走ったのです。

当時は自由に使える藁半紙が教室にかなり大量に備え付けられていましたので，紙飛行機や折り紙はもちろん，紙のお金を作ったり，手紙を送りあったり，ちょっとしたゲームをやったり，とやりたい放題で，教室の床には毎日大量の紙くずが散らかっているという有様でした。

当然のことながら座学の授業はまじめに聞きませんから，成績は私たちのクラスだけがた落ちでした。特に理数系科目は顕著だったようで，先生たちの間でさすがにまずいということになって途中から算数だけ男性のベテランの先生に代わりました。そうなると教室はその算数の授業だけは静まるのです。子供は子供なりにこの先生の授業はまじめに受けないとまずい，と今風に言うと「空気を読んで」いました。授業参観のときも同様で，担任の先生以外の大人が来ると静かになって，崩壊の様子など微塵も感じさせませんでした。狡猾に「空気を読んで」いました。今考えると本当に憎たらしい行動をしていました。

結局その担任の先生は 1 年で他の学校へ行ってしまうのですが，担任当初から崩壊していたのではなくて徐々に崩壊していったのは間違いありません。あの時私たちに必要だったのは，先生の授業に対する「信頼」でした。よくよく考えると，中学 3 年のときの担任の教諭（理科の先生）や高校の化学の先生にあったのは理科・化学に対する「誠実さ」と授業に対する「信頼」でした。そして，その「誠実さ」が私の化学への興味を引き出して，化学の道を歩むきっかけとなりました。

果たして今の，教える立場になった自分に「誠実さ」や「教育内容に対する充分な裏づけ・知識」はあるのか？常に変化し続ける化学の「今」を反映した授業をやっているのか？　予習を充分できずに慌てて教壇に立ったときに，ふと小学生のときの学級崩壊が頭をよぎります。このような感じで教えられる立場から教える立場になってみて，初めて教える立場の苦しみを知りました。今あらためて，小学 4 年生の担任の先生の悲しそうな顔しか思い出せないことを考えると，想像する以上に先生にとっては酷い状況だったのだろうと，ただただ猛省するのみです。

次回のエッセイは，「空気を読む」なんてことを全く考えずに勝手気ままに過ごした大学時代の学部学科の先輩であり，部活（オーケストラ）の先輩でもある鹿児島大学大学院理工学研究科の神崎　亮先生にご執筆をお願いいたしました。快くお引き受け下さったことに感謝いたします。

〔九州大学高等教育開発推進センター　大橋弘範〕